

巻
こころ
論

体育館の隅で、一人の子供が

感情を抑えきれずに大きな声を上げています。そこには、子供に正対するように腰をかがめ、その思いを聴き取る学生がいる。子供が自らの感情に折り合いをつけるまで、かかわりをもたながらじつくりと待つ。これは、

北海道教育大学釧路校の学生30名が、児童養護施設・釧路まわりも学園を訪問して取り組んでいる「学習支援活動」の一場面である。

子供に対して、学生が一方的に叱ることはない。なぜならば、

どんな時も子供には「そうせざるを得ない」理由があるからだ。その言動には、大人の文脈とは異なる、子供ならではの必然性がある。

子供たちは、「学ボラ」（学生ボランティアの略）と呼ばれ

子供理解でできる教師を

学ボラで豊かな目養う

この活動を楽しみに待っている。当日は学生が作成した教材を用いて学習に取り組む、グループごとにレクリエーションを行う中で、たくさん笑顔がこぼれる。一方、中にはちょっとした出来事をきっかけに他の子

の存在を背景に見ることもある。当日は学生が作成した教材を用いて学習に取り組む、グループごとにレクリエーションを行う中で、たくさん笑顔がこぼれる。一方、中にはちょっとした出来事をきっかけに他の子

供にイライラをぶつけてしまったり、学生を試すかのように活動から逸脱し進行を妨げる子供もいる。学生の不適切なかわりがこれらを誘発する場合もある。学生たちは子供とのかかわりを通して、その内面にある願いや悩み、葛藤を読み解く作業を重ね、「子供を理解する目」を養っていく。「学ボラ」と称されるこの活動は、子供と学生が共に学び合い、育ち合うひとときなのである。

大人の側に「豊かな目」があれば、子供は見えてこない。「学ボラ」を通して、深い子供理解ができる教師を学校現場に送りたい。（戸田 竜也）

とだ・たつや 北海道教育
大学釧路校講師